The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会
PSJ2019 CONFERENCE PROGRAM

第２２回（2019年度）大会プログラム・発表要旨集

日時：2019年11月23日（土）／24日（日）／PC 25日(月)

会場：京都外国語大学１号館４階・５階（懇親会４号館／PC９号館）

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6　電話：075-322-6012

大学 HP：http://www.kufs.ac.jp/
アクセス：http://www.kufs.ac.jp/access/index.html

大会受付	１号館４階エレベーターホール
会員総会・招待講演・シンポジウム	１号館４階 141 教室
研究発表	１号館４階 142 教室、143 教室、５階 152 教室、153 教室
ポスター発表	１号館５階 154 教室
書籍展示	１号館５階エレベーターホール
大会本部	１号館５階 156 教室
参加者休憩室	１号館４階 145 教室
語用論茶寮（サロン）	１号館４階 147 教室
懇親会	４号館６階学生食堂
ポストカンファレンス（PC）	９号館４階会議室

★　本プログラム目次　★

大会テーマ・スケジュール・参加費　・・p. 2
大会会場案内・会場図　・・・・・・・・・p. 3
プログラム一覧表　・・・・・・・・・・・p. 5
23 日　ワークショップ・・・・・・・・p. 7
　　ポスター発表・・・・・・・・・p.10
　　研究発表①～④・・・・・・・・p.11
　　語用論茶寮（サロン）・・・・・・・・・・p.17
　　招待講演・・・・・・・・・・・p.18
24 日　研究発表⑤～⑨・・・・・・・・p.19
　　語用論茶寮（サロン）・・・・・・・・・・p.26
　　シンポジウム・・・・・・・・・p.27
25 日　ポストカンファレンス（PC）・p.28
大会の注意点　・・・・・・・・・・・・・・p.30

★大会テーマ★
言語の共有・進化・適応をめぐる語用論

★　大会スケジュール（概要）　★

11 月 23 日（土）

9:30～：受付開始
10:20～12:00：ワークショップ
11:30～12:40：ポスター発表
（休憩 20 分）
13:00～13:35：研究発表①
13:40～14:15：研究発表②
（休憩 15 分）
14:30～15:05：研究発表③
15:10～15:45：研究発表④
（休憩 15 分）
16:00～16:20：会員総会
16:20～17:50：招待講演
（移動 10 分）
18:00～20:00：懇親会

（語用論茶寮（サロン））

11 月 24 日（日）

8:30～：受付開始
9:00～ 9:35：研究発表⑤
9:40～10:15：研究発表⑥
10:20～10:55：研究発表⑦
（休憩 20 分）
11:15～11:50：研究発表⑧
11:55～12:30：研究発表⑨
（12:30～13:30：昼食休憩）
13:30～16:00：シンポジウム
16:00～16:15：閉会式

（語用論茶寮（サロン））

11 月 25 日（月）（ポストカンファレンス）

14:30～：受付開始
15:00～16:30　講演

※語用論茶寮(サロン)は研究発表①～④、⑥～⑨の時間帯に並行して行います。担当する「話し相手」については p.17（23 日）、p.26（24 日）をご確認ください。[147 教室]

★　大会参加費　★

事前登録　一般会員 1,000 円、学生会員（院生・学部生）無料（非会員は事前登録できません）
当日申込　会員: 2,000 円、非会員一般: 2,000 円、非会員院生 2,000 円、非会員学部生無料
懇親会費　一般会員・非会員5,000 円、学生会員 4,000 円

※事前登録は日本語用論学会公式ホームページ⇒「会員専用ページ」⇒「大会参加」でできます。
※今年度会費が納入済みでないと、事前登録はできません。
※一般会員の事前登録には 1,000 円の事前納入（クレジット決済・銀行振込）が必要です。
※事前登録の締切は 11 月 13 日(水)です。
※当日受付の混雑緩和のためにも事前登録をお奨めします。
※当日受付での会費納入はできません。入会申込はできますが、会費は別途納入となります。

被災者への大会参加費免除について：
このたびの台風 15 号および台風 19 号で被災された会員の皆様には「2019 年度会費」並びに「2019 年度年次大会の参加費」を免除させていただきますので、事前に事務局にご連絡ください。

【日本語用論学会事務局】
〒606-0847　京都市左京区下鴨南野々神町１
京都ノートルダム女子大学 人間文化学部英語英文学科　小山 哲春 研究室内
E-mail: secretary (at) pragmatics.gr.jp　　Phone: 075-706-3670

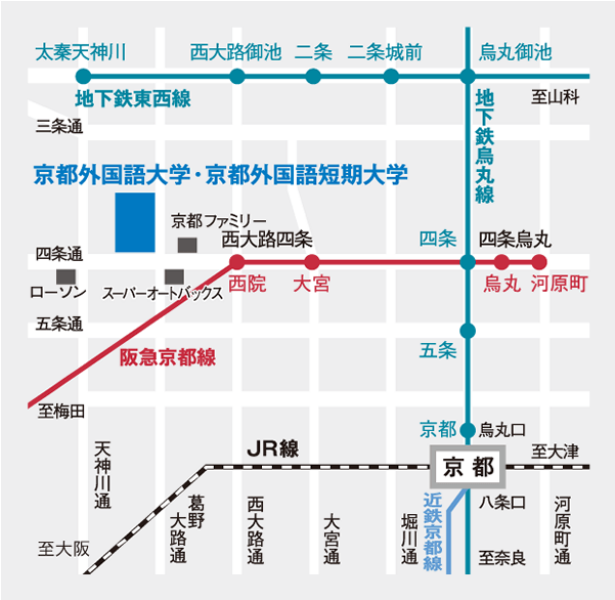
★　大会会場案内　★

〔交通について〕

★阪急京都線「西院」駅から西へ徒歩約 15 分。 または市バス「西大路四条」（西院）から 3・8・28・29・67・69・71 系統に乗車、「京都外大前」 で下車。（所要乗車時間約 5 分）

★JR 線「京都」駅烏丸口から市バス 28 系統、八 条口から市バス 71 系統に乗車、「京都外大前」で下車。（ともに所要乗車時間約 30 分）

★地下鉄東西線「太秦天神川」駅から南へ徒歩 約 13 分。



〔会場について〕

★大会会場は正門を入って左手すぐの 1 号館です。懇親会会場は 1 号館に隣接する 4 号館の 6 階となります。25 日のポストカンファレンスは喫煙場所に近い 9 号館 4 階会議室で行います。

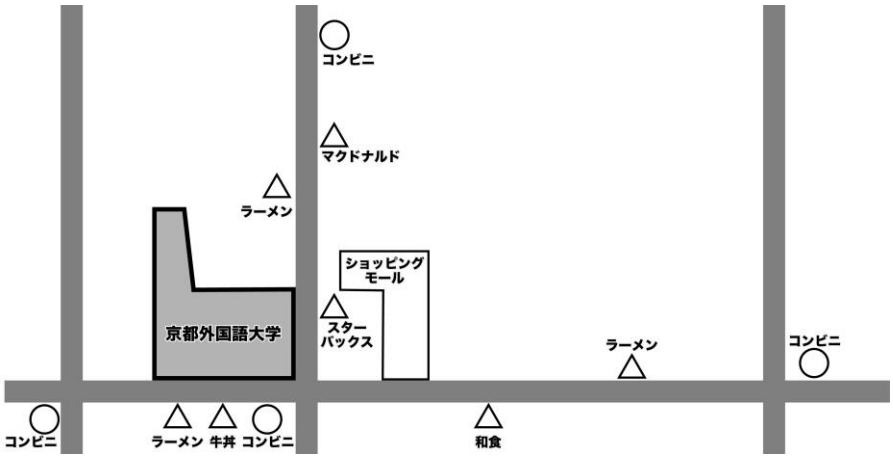
★喫煙は、9 号館周辺の喫煙場所でお願いいたします（構内地図をご参照ください）。

★飲み物の自動販売機は大会会場の 1 号館の 7 階と館外の地下部分にあります。

★大学構内の食堂や売店は、大会の二日間は営業していません。昼食については、周辺のレストラン、ショッピングモール、コンビニをご利用ください（下記のランチマップをご参照ください。）

★コピーや文房具については、周辺のコンビニをご利用ください。また、近くのショッピングモールには、電化量販店も入っています。

★大会会場のインターネット接続環境につきましては、本プログラムの巻末をご参照ください。

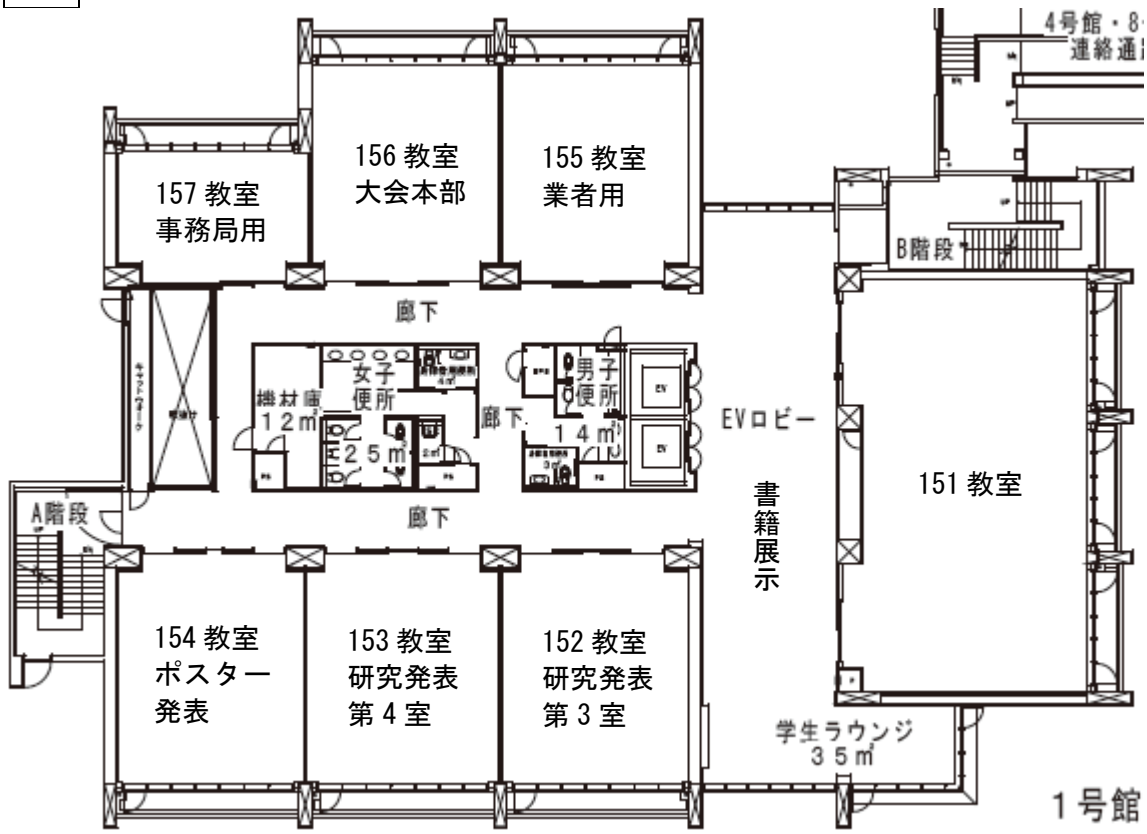


〔宿泊について〕

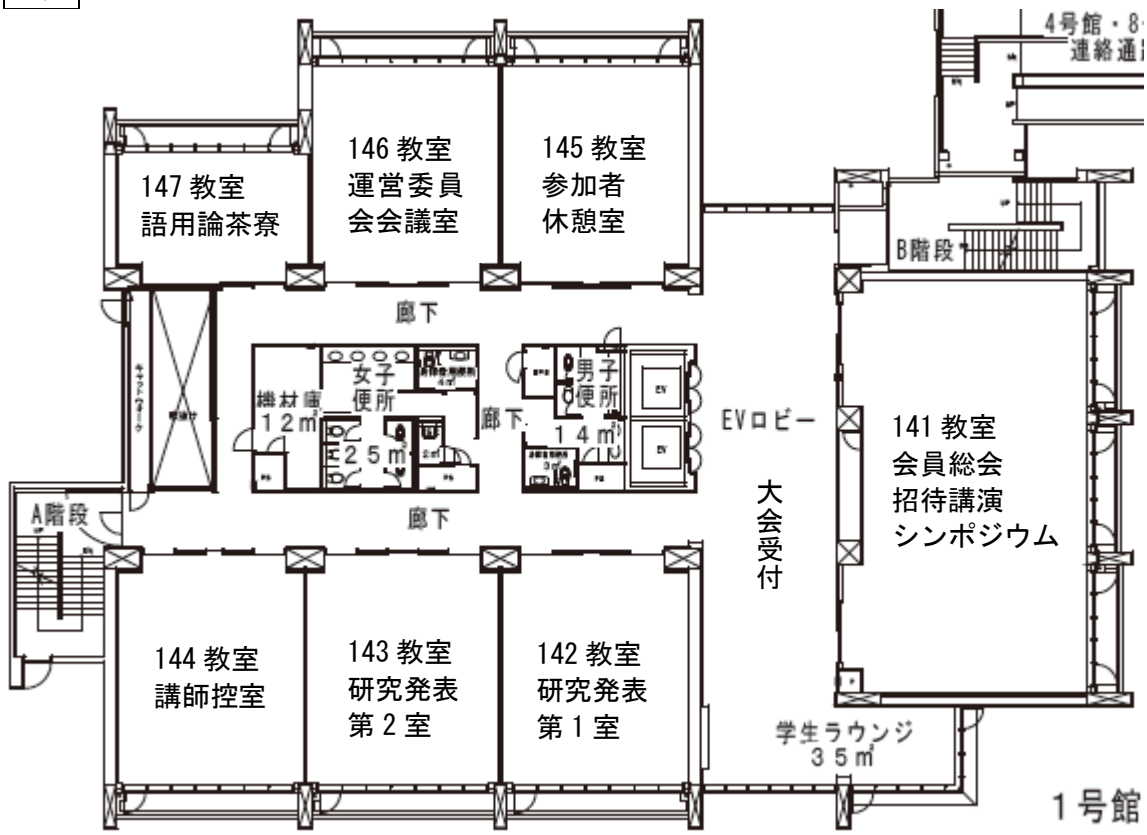
★この時期の京都周辺のホテルは例年混み合いますので、予約は早めにお願いします。場合によっては大阪府や滋賀県のホテルでも JR 京都線・琵琶湖線の沿線なら比較的短時間でご来場になれます。交通機関を確認のうえ、ご利用ください。

★大会会場図★

5階


157 教室
事務局用
156 教室
大会本部
155 教室
業者用
廊下
女子
便所
機材庫
12㎡
25㎡
廊下
男子
便所
14㎡
EV
EVロビー
書籍展示
151 教室
B階段
A階段
廊下
154 教室
ポスター
発表
153 教室
研究発表
第4室
152 教室
研究発表
第3室
学生ラウンジ
35㎡
1号館

4階


147 教室
語用論茶寮
146 教室
運営委員
会会議室
145 教室
参加者
休憩室
廊下
女子
便所
機材庫
12㎡
25㎡
廊下
男子
便所
14㎡
EV
EVロビー
大会受付
141 教室
会員総会
招待講演
シンポジウム
B階段
A階段
廊下
144 教室
講師控室
143 教室
研究発表
第2室
142 教室
研究発表
第1室
学生ラウンジ
35㎡
1号館

≪2019 年 11 月 23 日（土）≫ Saturday, Nov. 23, 2019					
9:30～	受付開始　Registration				
10:20 ～ 12:00	ワークショップ　Workshops				
	第 1 室　142 教室		第 2 室　143 教室		
	英語学習活動の相互行為における知識や理解の交渉 遠藤智子（東京大学）増田将伸（京都産業大学）黒嶋智美（玉川大学）横森大輔（九州大学）早野薫（日本女子大学） p.7		「教えられること」とその先にあるもの：相互行為の外国語教育にみる言語の「適応」と「共有」 竹田らら（東京電機大学）渡邊知子（昭和女子大学）抽冬紘和（福岡女学院大学短期大学部）土屋慶子（横浜市立大学）　p.8		
11:30 ～ 12:40	ポスター発表[154 教室]　Poster presentations				
	繰り返し表現が表明する発話者の態度―「肯定的態度」と「中立的態度」から「否定的態度」へ― KANJAMAPORNKUL Sathida（大阪大学） p.10	素朴言語理論から見る上級日本語学習者の動的な一人称の使用―俺、僕、私の場合― 花岡ベラ（ハワイ大学） p.10	肯否混在型の広告表現の解釈における首尾一貫性の分析 加藤久俊（フリー） p.11	日本語とインドネシア語の禁止表現の比較 ―禁止サインにおける「配慮」をめぐって― MUTHI Afifah（金沢大学） p.11	HSIEH Yu Ting (National Chiao Tung University) LAI Yuwen (National Chiao Tung University) ※本発表は発表者の事情によりキャンセルとなりました。
	研究発表　Oral presentations				
	第 1 室[142]司会：尾谷昌則	第 2 室[143] 司会：久保進	第 3 室[152]　司会：山内昇	第 4 室[153] 司会：井出里咲子	
① 13:00 ～ 13:35	直喩のレトリックとしての特性－非文学テクストとの比較から－ 菊地礼（中央大学） p.11	プロトタイプに基づく告白の語用論 山中信彦（埼玉大学） p.13	後日再会した場面での再感謝の機能―談話展開と感謝ストラテジーの日中対照分析から 市原明日香（お茶の水女子大学）　p.14	Pragmatic Analysis of the Inaugural Speeches of Presidents Obama and Aquino: A Comparative Study GUERRERO Maria Leonora (Philippine Normal University) p.15	
② 13:40 ～ 14:15	中国語母語話者による日本語メタファー表現の比喩解釈 銭秀双（江蘇仁愛教育） p.12	発話行為における適切性条件の共通基盤性と間接発話行為の関連性について 佐藤雅也（京都大学） p.13	前方照応における中国語指示詞「这」「那」の使い分けについて ―日本語・英語との対照を兼ねて― 孟鷹（名古屋大学） p.14	Pragmatics of the Japanese instructional speech: Grammatical constructions and social meanings of women's language HIRAMOTO Mie (National University of Singapore)　p.16	
	休憩 14:15～14:30				
	第 1 室[142]司会：鍋島弘治朗	第 2 室[143] 司会：早野薫	第 3 室[152]　司会：大江元貴	第 4 室[153]　司会：黒嶋智美	
③ 14:30 ～ 15:05	[Special Lecture] Affection-based face (情面) and its interpersonal functions Prof. RAN Yongping (Guangdong University of Foreign Studies) 14:30～15:20 (50 min.) p.12	Searle の発話行為分類における assertive と expressive の連続性 ―日本語の文末表現ノダ／ダロウ／デハナイカを例に― 春日悠生（京都大学／日本学術振興会）　p.13	依頼メールにおける外的修正ストラテジーの習得について―JFL 中国人日本語学習者を対象として― 孫雨晴（大阪大学） p.15	Using Board Games to Support and Enhance Speaking and Pragmatic Skills in English Language Learners DUNKLE Shane (University of Chicago) p.16	
④ 15:10 ～ 15:45		気遣いや心配りに関する語用論的プロセス―日本語教育への応用を目指して 中井延美（明海大学） p.14	日本映画の中国語字幕における異文化要素 張顔顔（東北大学） p.15	Monologic Deixis: Two Distinct Conceptions behind Reflexive Speech Event　p.17 KOGUMA Takeshi (University of Shiga Prefecture) IZUTSU Katsunobu (Hokkaido University of Education) KIM Yong-Taek (Georgia Institute of Technology)	
	休憩 15:45～16:00				

16:00～ 16:20	会員総会　General Meeting　[141 教室] （本大会のテーマについて・大会発表賞の発表など） p.17
16:20 ～ 17:50	招待講演　Plenary Speech　[141 教室]　司会：田中廣明（京都工芸繊維大学） “English as a Lingua Franca: The Pragmatic Perspective” Prof. Istvan KECSKES（NY 州立大学） p.18
18:00～	懇親会　Conference Banquet　4 号館 6 階学生食堂　20:00 終了予定 p.19

≪2019 年 11 月 24 日（日）≫ Sunday, Nov. 24, 2019				
8:30～	受付開始　Registration			
	研究発表　Oral presentations			
	第 1 室[142]司会：小松原哲太	第 2 室[143] 司会：中井延美	第 3 室[152] 司会：笹本涼子	第 4 室[153] 司会：北野浩章
⑤ 9:00 ～ 9:35	譲歩からの意味変化 -韓国語の連結語尾 -(u)ntul を中心に YU Jooyoung（九州大学） p.19	慣習的表現の非慣習的読みに関する考察 ―「文字通りの NP」を例に― 近大志（京都大学） p.21	英・仏・西語談話標識 well, bon, bueno に共通する対人的調整機能 高村遼（青山学院大学） p.23	A Conversation Analytic Study of Doing Challenging in English: Focusing on Appendor Wh-Questions p.25 JONES Sally (Nagoya University)
⑥ 9:40 ～ 10:15	日本語における副詞節の後置 海寶康臣（九州歯科大学） p.20	of+抽象名詞の形式と機能の関係 藤原崇（摂南大学）中村文紀（北里大学）鈴木大介（摂南大学） p.21	話題転換マーカーに関する日英対照研究: speaking of which と「そういえば」の対応関係を例に 山内昇（大同大学）新實葉子（大同大学） p.23	The pragmatics of three Chinese reformulation markers: ‘Zhe Me Shuo Ba’, ‘Ye Ke Yi Shuo’, and ‘Ye Jiu Shi Shuo’ PANG Longjie (Nagoya University) p.25
⑦ 10:20 ～ 10:55	司会：鍋島弘治朗 [Invited presentation] *Ei* as Topic Transition Signal in Mandarin Conversation Prof. YU Guodong (Shanxi University) p.20	事態の直前を表す「V ところ」について 染谷聡（東京福祉大学） p.22	談話標識「トイウカ」の手続き的意味―文法化の視点から― 川北麻由（東京大学） p.24	A Study of the Speech Event of ‘Offering’ in English from the Viewpoint of Politeness SUZUKI Toshihiko (Waseda University) SATO Ami (Nagoya University of Commerce and Business) p.25
	休憩 10:55～11:15			
	第 1 室[142] 司会：金丸敏幸	第 2 室[143] 司会：堀江薫	第 3 室[152] 司会：増田将伸	第 4 室[153] 司会：山口征孝
⑧ 11:15 ～ 11:50	「今日紹介する商品はこちら。最新薄型テレビ！」：主題の導入を演出する定型表現 大江元貴（金沢大学） p.20	複合動詞「X＋散らかす」の新規的用法―人はなぜキレ散らかすのか？― 松浦光（横浜国立大学）菊地礼（中央大学）貝森有祐（東京大学） p.22	ママ友グループ間会話におけるイン／ポライトネス分析 ―子どもの扱いに注目して― 大塚生子（大阪工業大学） p.24	Onomatopoeia, Translation and Relevance: A Corpus Pragmatics Approach SASAMOTO Ryoko (Dublin City University) p.26
⑨ 11:55 ～ 12:30	絵文字を用いた隠語の生成過程と変換プロセス ―Twitter「情報垢」の投稿を例に 西村綾夏（京都大学） p.21	insubordination と慣習性：感情表出機能を持つ that 節の場合 平尾恵美（奈良女子大学） p.22	相互行為における引用標識「って」：連鎖とターンデザインに基づく検討 臼田泰如（国立国語研究所） p.24	Pragmatic functions of gestures in L1 and L2 interaction IKE Saya (Sugiyama Jogakuen University) p.26
	昼食休憩 Lunch　12:30～13:30			
13:30 ～ 16:00	シンポジウム『音声・言語・こころ：ヒトのコミュニケーションの進化的起源をいかに捉えるか』[141 教室]　登壇者：岡ノ谷一夫（東京大学）香田啓貴（京都大学）橋爾和秀（九州大学）司会：松井智子（東京学芸大学） p.27			
16:00	閉会のあいさつ　Concluding remarks [141 教室]　16:15 一切終了予定 p.28			

１１月２３日（土曜日）

受付開始 / Registration（9:30～）

ワークショップ / Workshop（10:２0～12:00）

第 1 室[142 教室]　ワークショップ 1 / Workshop 1(10:20～12:00)

●英語学習活動の相互行為における知識や理解の交渉

遠藤智子（東京大学）増田将伸（京都産業大学）黒嶋智美（玉川大学）横森大輔（九州大学）早野薫（日本女子大学）

英語学習活動の相互行為における知識や理解の交渉

遠藤智子（東京大学）

相互行為において、参与者のうちの誰が何をどの程度知っているのか、知っている権利や義務を持つのかは非常に重要である。知識の相対的な配分への配慮は認識性と呼ばれ、会話分析において近年強い関心を集めている(Heritage 2012a,b 等)。認識性は発話の形式やタイミング等によって示されるが、従事している活動や参与者間の関係によってその示され方には違いがある。大学における英語教育では、「対話的・主体的」な学びを実現し、実践的な英語能力を涵養する機会を与えるために、学生同士のペアやグループでの活動が多く取り入れられるようになってきているが、課題に取り組む際には、他のメンバーとの知識や理解に関する交渉がしばしば見られる。本ワークショップは 4 件の事例分析を通じ、英語学習活動において認識性がどのように示され、交渉されるのかを考察する。

参考文献：Heritage, J. 2012a. Epistemics in Action: Action Formation and the Territories of Knowledge. *Research on Language and Social Interaction* 45(1): 1-29.
Heritage, J. 2012b. The Epistemic Engine: Sequence Organization and Territories of Knowledge. *Research on Language and Social Interaction* 45(1): 30-52.

正解到達型読解グループワークにおける解答の不一致への対応

増田将伸（京都産業大学）

本発表では、TOEIC® Test の Reading Part の対策授業において、解答が一致しなかった場合にグループメンバーがその不一致に対応する場面を検討する。本発表のグループワーク（以下 GW）について特徴的なのは、自分の主観に基づく意見や既有知識を発表するのではなく、正解が設定されている問題についての理解内容を発表するという点である。したがって、意見を一致させるだけでなく、意見が正しい理解に基づくことも GW で指向される。出された解答が一致せず、解答に関わる理解が不十分な場合、自分の解答の再吟味が不一致解消の手段として指向されることがある（cf. Pomerantz 1984）。また、正答に関係する要素が提示されても、理解の不足から、不一致が合理的に解消できない例も多い。このような不十分な理解に基づく（不）一致の表れ方から、当該 GW と認識性との関係を検討する。

参考文献: Pomerantz, A. 1984. “Pursuing a response.” In M. J. Atkinson and J. Heritage (eds.). *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. 152-163. Cambridge: Cambridge University Press.

知識の確認デバイス：「て（いう）こと」による理解候補の提示

黒嶋智美（玉川大学）

本発表では、授業内グループワークにおける学習者同士のやりとりを分析し、「て（いう）こと」という聞き返しの形式が互いの知識を確認するためのデバイスとして用いられることを記述する。「て（いう）こと」による確認要求は、発話者の理解候補を提示し、受け手の確認あるいは否定をレリバントにする。そのような応答は，それが拠り所となるような知識があることが前提とされるため（Heritage, 2012）、受け手が自分のそれまでの理解を代わりに示す時，そのような知識がないことを含意する。たとえば、課題内容の理解候補に対し、受け手は、自身の理解がいかに異なっているのかを示すことで、確認も否定も出来ないことを主張する。このため、「て（いう）こと」による理解候補の提示は、互いの知識状態を確認し合うためのデバイスであるといえる。

参考文献：Heritage, J. 2012. Epistemics in Action: Action Formation and the Territories of Knowledge. *Research on Language and Social Interaction* 45(1): 1-29.

リンガ・フランカとしての英語使用場面における断片的発話と認識的スタンスの調整

横森大輔（九州大学）

異なる母語を持つ者同士が英語をリンガ・フランカとして用いて会話する場合、統語的に完全な節構造を持たない「断片的」発話（例えば名詞一語だけの発話）がしばしば使用される。そのような断片的発話は、“oh”などの応答表現や笑いの有無、プロソディなどの点で発話デザインに微細な区別が観察される。本発表では、日本人大学生と留学生の会話を分析対象とし、断片的発話の発話デザインの違いとそれによって調整される認識的スタンスが、相互行為の展開とどう関わり合っているかを記述する。特に、相手発話の一部の語句を繰り返すことで反応を示すような断片的発話に焦点をあて、それらが“oh” などを伴う場合は理解や同意を明確に伝えて相互行為を先に進めるのに対し、それらを伴わない場合は「その語句は聞き取ったが理解に不確かさが残っている」というスタンスを示し、それによって相手からの説明を呼び込むことができることを論じる。

参考文献：Heritage, J. 1984. A Change-of-state Token and Aspects of its Sequential Placement, In M. J. Atkinson and J. Heritage (eds.). *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. 299-345. Cambridge: Cambridge University Press.

英語個人面談における多層的「知識」のマネジメント

早野薫（日本女子大学）

本発表は、英語母語話者である大学教員と大学生とによる、英語による個人面談を会話分析の方法を用いて分析する。この場面では、「（面談のトピックとなっている、学生のプロジェクトなどに関する）専門的知識」と「（使用言語である英語に関する）言語的知識」という、２つのタイプの知識をめぐる参加者達の態度、志向性が、様々な形で相互行為を形づくる。本発表では、とくに、教員からアドバイスが与えられた際の学生の反応を起点としたやりとりに着目する。アドバイスを学生が理解したということが十分に示されなかった際、それが、専門的知識を伝える上でのトラブルのせいなのか、言語的なトラブルのせいなのかがどのように交渉されているか、そのプロセスにおいて、英語の感嘆詞（oh など）と日本語の感嘆詞（「ああ」など）がどのように使い分けられているかを記述する。

第 2 室[143 教室]　ワークショップ 2 ／ Workshop 2(10:20～12:00)

●「教えられること」とその先にあるもの：相互行為の外国語教育にみる言語の「適応」と「共有」

竹田らら（東京電機大学）渡邊知子（昭和女子大学）抽冬紘和（福岡女学院大学短期大学部）土屋慶子（横浜市立大学）

「教えられること」とその先にあるもの：相互行為の外国語教育にみる言語の「適応」と「共有」

オーガナイザー：竹田らら （東京電機大学）

外国語によるやりとりの場に着目すると、学習者が第二言語として用いる「言語の適応」に加え、共通語としての英語（English as a Lingua Franca、以下 ELF）や複数言語併用（Translanguaging、以下 TL）を通した「言語実践の共有」が、異なる言語・文化の背景を持つ人々との間で求められていることに気づかされる。そこで、本ワークショップでは、参与者がいかに関わり合ってやりとりするか、また、授業でいかに言語実践を教えられるかに関する方法を模索する。具体的には、日本人英語学習者の反復表現を通した「言語の適応」としてのやりとりを分析すると共に、ELF 環境での日本人英語使用者による曖昧表現の考察、さらには、TL の概念を援用して、英語を含む複数の言語資源から参与者がいかに言語交渉を行い、「共有」に至るのかを観察する。その上で、日本の英語教育で語用論的側面を育み、その運用を促進させる際にいかなる指導が可能なのか、問題提起する。

日本人英語学習者の話題展開と理解構築：会話とチャット形式作文での反復表現を比較して

竹田らら （東京電機大学）

本発表では、相互行為での話題展開と参与者間の理解共有について、日本人英語学習者ペア（初中級レベル）による会話とチャット形式作文での反復表現を分析する。これまで、反復表現と、会話での協調性（町 2018）や作文での結束性との関係が報告されているが、会話と作文での反復表現を、話題展開や理解構築で比較した研究は、管見の限り観察されていない。参与者間の相互理解を確定していく過程（基盤化）（Clark 1996）から会話とチャット形式作文を分析した結果、会話では 1 つの話題に対し理解を確認する反復表現が多く、チャット形式作文では反復表現よりも関連情報の積み重ねが多かった。このように、同じ反復表現でも、相互行為の形態によって出方が異なることから、反復表現の語用論的側面に関する学習内容を教室外で生かす際に、授業で扱わない「コンテクストに応じた相互行為」について、各学習者が把握し対応していく必要性を提起する。

参考文献：(1) Clark, H. 1996. *Using Language*. Cambridge. (2) 町沙恵子. 2018.「日本語の三者会話に見られる会話の編み込み構造（ブレイド・ストラクチャー）と共創性 –他者の発話の繰り返し・パラフレーズの分析から–」、『共創学会第 2 回年次大会予稿集』、14-17.

English as a lingua franca (ELF) での日本人英語使用者の曖昧表現の使用と参与者間の共有

渡邊知子（昭和女子大学）

本研究では、English as a lingua franca (ELF) での対話における、日本人英語使用者による曖昧表現の頻度、機能と、コミュニケーション上の効果を、語用論と談話分析の観点から論じる。アジア各地における ELF での対話が収録された Asian Corpus of English (Kirkpatrick et al. 2019) 中、日本人英語使用者による曖昧表現の使用を分析した結果、聞き手へのネガティブ・ポライトネス、発話内容の不明瞭さ、言語力や表現力の補足を表すといった機能の例が見られた。曖昧表現は間主観性に訴えながら使われており（Overstreet 1999）、談話の目的の達成に向けた意味の交渉において、参与者間で直接的な障害となることなく語用論的・談話構成上の方略として機能していることが示唆された。

参考文献：(1) Kirkpatrick, A., Lixun, W., Patkin, J. and Subhan, S. 2019. *The Asian Corpus of English (ACE)*. http://corpus.ied.edu.hk/ace/ (Accessed on 6 October 2019). (2) Overstreet, M. 1999. *Whales, Candlelight, and Stuff Like That*. Oxford: Oxford University Press.

異文化間グループ相互行為における Communicative competence としての Translanguaging

抽冬紘和（福岡女学院大学 短期大学部）

本発表では、アジア人留学生、日本人学生、アメリカ人グループアシスタント（留学生）からなるグループ相互行為内での、Communicative competence (Hymes 1972) としての言語レパートリー使用を複数言語併用（Translanguaging）(García & Wei 2014) の枠組みから考察する。分析の結果として、2 点のことを事例として提起する。1) 参加者の学生たちは複数言語併用で、共通レパートリー言語として、英語ではなく、日本語（留学生にとっては日本留学中での習得目標言語・外国語、日本人学生にとっては第一言語）を使用し、コミュニケーション能力として相互行為を遂行する。2) このグローバル教育プログラムでは、英語能力とコミュニケーション能力は一致して機能するものとみられているが、これらは独立して習得、機能するものであり、その際、複数言語併用が用いられている点である。

参考文献：(1) García, O. and Wei, L. 2014. *Translanguaging: Language, Bilingualism, and*

Education. New York: Palgrave Macmillan. (2) Hymes, D. 1972. “On Communicative Competence.” In Pride, J.B. and Holmes, J. (eds.) *Sociolinguistics*, 269-293. London: Penguin.

英語模擬授業での学生教師によるトランスランゲージングとマルチモーダリティの使用：指示・説明行為を中心に

土屋慶子 （横浜市立大学）

本発表では、クリル（CLIL、Content and Language Integrated Learning）(Coyle, Hood, & Marsh 2010）を取り入れた、学生教師による英語の模擬授業のデータをもとに、学生教師がトランスランゲージ（複言語話者の統合的な言語レパートリーを用いた多言語教育実践）(García & Wei 2014）や手振りなどのマルチモーダルな記号的資源をいかに使用し、生徒との相互行為、意味の構築を行っているのか、指示・説明行為に注目し分析した結果を報告する。初期的な段階ではあるが、高校生を対象とした模擬授業では、共通語としての英語（English as a Lingua Franca）の特徴である繰り返しや言い直しの使用が、中学生を対象とした授業では両言語での概念説明がみられ、両者で学生教師の直示的手振りによる回答の促し行為が観察された。

参考文献：(1) Coyle, D., Hood, P. and Marsh, D. 2010. *Content and Language Integrated Learning*. Cambridge. (2) García, O. and Wei, L. 2014. *Translanguaging*. London.

ポスター発表 / Poster Presentations（11:30～12:40）

ポスター発表会場［154 教室］

1. 繰り返し表現が表明する発話者の態度―「肯定的態度」と「中立的態度」から「否定的態度」へ―

KANJAMAPORNKUL Sathida（大阪大学）

本発表では、発話者による「感情の表出」を中心に繰り返し表現が表明する発話者の態度の種類を探り、それぞれの態度がどのように「否定的態度」に移行するのかについて明らかにすることを目的とする。繰り返し表現の機能は一見すると、「時間稼ぎ」「相手の発話の促進」「あいづち」「説明要求／確認要求」という機能であると考えられるが、実際の発話者の主たる狙いはそうではなく、相手の発話に対してある種の「感情の表出」を伝達することにこそあると言える。その「感情の表出」として、繰り返し表現によって発話者の「肯定的態度」「中立的態度」「否定的態度」という 3 種類の態度が表明されることが見られた。しかし、情報の伝達という観点から考えたとき、情報的価値がないに等しいと考えられる繰り返し表現を用いる理由としては、どちらかと言えば、「肯定的態度」と「中立的態度」よりも、「否定的態度」の方が優位に立つのではないかと考えられる。

参考文献：(1)田中妙子.1997.「会話における＜くりかえし＞―テレビ番組を資料として―」、『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』9、47-67. (2)中田智子.1992.「会話の方策としてのくり返し」、『国立国語研究所報告 104 研究報告集』13、267-302. (3)牧野成一.(1980)『くりかえしの文法―日・英語比較対照―』東京：大修館書店.

2. 素朴言語理論から見る上級日本語学習者の動的な一人称の使用―俺、僕、私の場合―

花岡ベラ（ハワイ大学）

本発表は、談話分析の手法を使用し、日本語学習者と日本人大学生との自然会話の中での上級日本語学習者の一人称の選択とそれに対する自作の素朴言語理論(今井・野島，2003)を明らかにする。具体的には、ジェンダーアイデンティティを指標する「俺」、「僕」、「私」の自然会話での使用を調査する上で、刺激回想法のインタビューで参加者が述べた素朴言語理論を探る。会話データの分析から日本語学習者は日本人と同様に一人称を話す状況に応じて、動的に選択し、相互行為でのアイデンティティを構築することがわかった。しかし、実際には自分自身がどのような一人称を使用しているのかを完全には把握していない場合もあった。数カ月に及ぶ多数のインタビューから、長期的な素朴言語理論の発達、理論作成への様々な影響や、その結果としての理論に対する迷いが見られた。

参考文献：(1)今井むつみ・野島久雄. 2003.『人が学ぶということ－認知学習論からの視点』東京：北樹出版.

3. 肯否混在型の広告表現の解釈における首尾一貫性の分析

加藤久俊（フリー）

広告表現として広く用いられる構造に、キャッチフレーズとボディコピーの組み合わせがある。中でもキャッチフレーズに否定命題を用いる一方で、ボディコピーの主旨にキャッチフレーズとは肯否が逆転する事態が含まれる「肯否混在構造」を持つ広告表現は、特に面白い効果を生む。本発表では、キャッチフレーズとボディコピーの間で主旨が矛盾する印象を与える肯否混在構造に対して、消費者が首尾一貫性を持つ解釈を与えるメカニズムがいかなるものか、メンタル・スペース理論（Fauconnier 1985）の枠組みを用いて考察する。具体的には、広告表現が構築する複数のメンタル・スペースに対して Dancygier（2005）や Dancygier and Sweetser（2014）で提案された viewpoint が付与されることで、解釈の首尾一貫性が得られることを示す。

参考文献：(1) Dancygier, B. 2005. “Blending and Narrative Viewpoint: Jonathan Raban’s Travels Through Mental Spaces.” *Language and Literature*, 14(2), 99-127.　(2) Fauconnier, G. 1985. *Mental Spaces*. Cambridge, MA: MIT Press (Rev. ed. 1994.　Cambridge: Cambridge University Press).

4. 日本語とインドネシア語の禁止表現の比較 ―禁止サインにおける「配慮」をめぐって―

MUTHI Afifah（金沢大学）

「禁止行為」は相手のフェイスを脅かす可能性が高い。対面的なコミュニケーションだけでなく、不特定の相手を対象とする看板・標識によるコミュニケーションの中にも認められる。だが、中崎（1999）によると、禁止サインは、危険防止のための社会的ルールとして、特定の場所に限定されていても多数の利益を遵守するためのルールとして、さらには常識の枠内でのマナーを周知させるものとして設置されている。それを考えると、禁止行動によって脅かされる可能性のあるネガティブ・フェイスはどのように考慮されているか。言語や文化的背景が異なる日本とインドネシアの禁止サインではどのような配慮がなされているのか、明らかにする。

参考文献：中崎温子. 1999. 「「禁止/不許可」提示・標識表現の・英語対照分析」、『北陸大学紀要』23、179-189

5. How you say “thank you” matters: Grateful & Apologetic Gratitude Production and Perception of Mandarin Speakers

HSIEH Yu Ting (National Chiao Tung University)
LAI Yuwen (National Chiao Tung University)

※本発表は発表者の事情により、キャンセルとなりました。

研究発表①～④ / Oral Presentations（13:00～15:45）

研究発表第 1 室［142 教室］

司会①②：尾谷昌則（法政大学）

①13:00～13:35

直喩のレトリックとしての特性―非文学テクストとの比較から―

菊地礼（中央大学）

本発表は文章ジャンルごとに直喩を分析することで、その使用実態とレトリックとしての特性を明らかにする。たとえば、国会のやり取りにおいては、話者は聞き手に自身の主張を誤解無く伝達し、適切な回答がなされることを要求する。そのために「金の取引業者は雨後のタケノコのように増加した」のように物事の様態を誤解無く伝えるための注釈的な要素として直喩が用いられる。文学においては、登場人物の心理や作者独自の物事の把握を示すために直喩が用いられる。直喩には様態の説明と心理の投影という機能の二極が存在する。この二極を用いて、物事の様態を説明すると同時に発話者の心理を投影するという複線的な表現を可能とすることが直喩の文学作品における主な役割である。このような直喩のレトリックとしての特質を「現代日本語書き言葉均衡コーパス」及びエンターテイメント・純文学・詩作品から収集した用例によって論証する。

②13:40～14:15

中国語母語話者による日本語メタファー表現の比喩解釈

銭秀双（江蘇仁愛教育）

本発表は、有薗（2016）からの啓発をきっかけに、鐘（2013）を中心にした先行研究を承け、中国人若年層日本語教師が日本語メタファー表現に対する比喩解釈のアンケート調査を通じ、日中両国における同じメタファー表現の解釈のずれについて述べる。また、文脈なし、文脈ありのそれぞれの場合、メタファー表現理解への影響を検討し、文脈選定の重要さについて論じていく。更に、具体例を取り上げながら、中国人母語話者は「植物」に対する認知のあり方を述べた上で、中国人日本語学習者のみならず、中国人日本語教師自身も日本社会から生まれた特別な文化の把握が重要であることを提言したい。

参考文献：(1) 有薗智美. 2016.「日本語母語話者による英語の名詞転換動詞解釈とフレーム」、『日本認知言語学会論文集』、16、530-535.（2）鐘 勇．2013.「中国人日本語学習者のメタファー表現理解に影響する要因：母語とメタファー基盤に関わる知識を中心に」、『比較社会文化研究』、34、1-14.

司会③：鍋島弘治朗（関西大学）

③14:30～15:20(50 min.) [Special Lecture]

Affection-based face (情面) and its interpersonal functions

Prof. RAN Yongping (Guangdong University of Foreign Studies)

Abstract: Face, emotion and relational work are closely interwoven, their interrelationship needs to be further explored in different social interactions. In Chinese society it is more generally accepted that creating or maintaining interpersonal relationships (*guanxi*, 關係) is heavily based on everyday *renqing* (人情, lit. favor/doing a favor) and *mianzi* (face, 面子) practices, otherwise interpersonal relationships are most likely to be damaged. Drawing from the Chinese data of interpersonal conflicts and their dispute mediation, this presentation analyzes how *qingmian* (情面, lit. affection-based face) is interactionally damaged and then reestablished between the participants in Chinese context, on the basis of a *qingmian*-threat Regulation Model (QTR) (Ran & Zhao 2018, Ran 2018), specifically the focus is put on how *qingmian* is interactionally achieved and how it coordinates with social actions of *renqing* and *mianzi* and finally harmony is fostered. For the implication, some refinement of the concept of face (for instance, by Arundale 2006, 2010) is proposed, thus providing new insights into culture-specific face as well as the dynamics of interpersonal relationship management.

References:

Arundale, R. 2006. Face as relational and interactional: a communication framework for research on face, facework, and politeness. *Journal of Politeness Research* 2(2). 193-216.

Arundale, R. 2010. Constituting face in conversation: face, facework and interactional achievement. *Journal of Pragmatics* 42(8). 2078-2105.

Ran, Y. P. 2018. The *Renqing Principle* in managing interpersonal relationship from the perspective of interpersonal pragmatics.外國語(*Journal of Foreign Languages*) (4): 45-55.

Ran, Y. P. & L. S. Zhao. 2018. Building mutual affection-based face in conflict mediation: A Chinese relationship management model. *Journal of Pragmatics* 129: 185-198.

RAN Yongping/冉永平

Professor, Ph.D., director of Center for Linguistics & Applied Linguistics at Guangdong University of Foreign Studies, P.R. China. He is editor-in-chief for *Xiandai Waiyu* 現代外語, a top journal of linguistics and applied linguistics in China. He is an editorial board member for journals *Chinese as a Second Language Research* (Mouton de Gruyter), *Journal of East Asian Pragmatics* (Equinox), and for some Chinese journals of linguistics and linguistics. He is a vice chairperson of both China Pragmatics Association and China Association for Discourse Studies. He was a visiting scholar in University of Wales (UK) from 2003-2004, and a Fulbright scholar in University of California (Berkeley, USA) from 2009-2010. He has published articles on pragmatics in *Intercultural Pragmatics*, *Pragmatics and Society*, *Journal of Pragmatics*, *Text and Talk, Journal of Politeness Research* and in Chinese journals of linguistics. He has also published several books of pragmatics. His main research interests include pragmatics and discourse studies. The webpage about his details is: http://clal.gdufs.edu.cn/info/1265/2838.htm

研究発表第 2 室［143 教室］

司会①②：久保進（松山大学）

①13:00～13:35

プロトタイプに基づく告白の語用論

山中信彦（埼玉大学）

本発表では、国語辞典にみられる広義の告白から信仰告白や恋愛の相手に対する愛の告白などを除外した「聞き手にとって未知であり話し手の面目をつぶししかも否定的に評価されるだろう、と想定される事柄を聞き手に告げること」という告白の下位類型を対象とし、Coleman and Kay（1981）の原型意味論的な考え方に基づいてその原型を仮定する。さらに、この原型の要素のいずれかを欠く例を示す。また、告白という行為は計画から遂行まで長期間にわたることも稀ではなく、その遂行が話し手と聞き手の双方に多大な影響（Austin 1962 の発語媒介効果）を及ぼすこともしばしばある。そこで、Lakoff（1987）のプロトタイプ・シナリオという考え方を援用して告白という行為にいたる過程とその結果を記述することを試みる。データは小説から取り出した登場人物同士の間の告白の場面である。

参照文献：(1)　Coleman, L. and Kay, P.1981. “Prototype Semantics: the English Word ‘Lie’.” *Language* 57(1), 26-44. (2) Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago.

②13:40～14:15

発話行為における適切性条件の共通基盤性と間接発話行為の関連性について

佐藤雅也（京都大学）

本発表の目的は、適切性条件を言語化することで行われる間接発話行為の発語内の力の決定機序についての提案を行うことにある。まず、Gordon and Lakoff (1975) で述べられる会話の公準などの規則では、発語内の力のゆれを説明できないことについて述べる。その上で、どのような適切性条件を満たす情報が暫定的に共通基盤（Stalnaker 2014）となっているのかが発語内の力の決定・判断の基準となっていると主張し、この観点で発語内の力のゆれの問題が解決されることについて説明する。補足として、どういった話し手の意図により言語化される適切性条件が決まるのかという点についてもふれる。

参考文献：(1) Gordon, D. and G. Lakoff. 1975. Conversational postulates. In P. Cole and J. L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics Volume 3: Speech Acts*. 83-106. New York: Academic Press. (2) Stalnaker, R. 2014. *Context*. Oxford: Oxford University Press.

司会③④：早野薫（日本女子大学）

③14:30～15:05

Searle の発話行為分類における assertive と expressive の連続性
―日本語の文末表現ノダ／ダロウ／デハナイカを例に―

春日悠生（京都大学／日本学術振興会）

日本語文末表現の持つ個々の「用法」は、形式ごと／研究者ごとに独立して立てられることが多く、それらの比較が難しくなっている。本研究ではそのような用法の乱立を防ぐため、用法を「発話行為」と同一視し、Searle (1979) による発話行為の 5 分類を、用法記述に適した形に精緻化することを目的とする。

本研究では、文末にノダが用いられる発話（以下「ノダ文」）が持ついくつかの用法を Searle の発話行為の分類に当てはめることを試みた。その結果、ノダ文の「受け止める用法」が、Searle の発話行為分類における演述（assertive）と表出（expressive）の中間的な性質を持っていることがわかった。他にも、ダロウやデハナイカの「確認要求」等の用法も似た性質を持っていることから、Searle の分類における演述行為と表出行為の連続性を示し、その連続性が依拠する軸として「命題内容が話し手と聞き手の間で前提となっているか否か」と「命題に対する心理状態が強く表現されているか否か」の 2 軸を提案する。

④15:10～15:45

気遣いや心配りに関する語用論的プロセス―日本語教育への応用を目指して

中井延美（明海大学）

外国語を習得する過程には、学習者が、人に対する気遣いや心配りを、目標言語それ自体を用いて表現する方法を学ぶ局面がある。本研究は、日本語教育に焦点を当てる。異なる価値観を有する外国人学習者には、「気遣う」「心を配る」という行為の解釈がしばしば難しい場合がある。本研究は、そのような学習者に対し、気遣いや心配りを具現することばの仕組みを、言語知識として具体的に提示するための基礎研究となることを目指している。言語コミュニケーションのなかで「客を気遣う」「客に対して心を配る」ことが一般に求められる接客場面のデータをもとに、気遣いや心配りの仕組みを関連性理論の枠組みから「表意」をもとに分析・検討する。伝達された発話の意図を、「飽和」と「アドホック概念構築」によって真に解釈しようとするプロセスにおいて聞き手が発揮する能力が「気遣い」や「心配り」に該当する場合があると考えられる。

参考文献：今井邦彦・西山佑司. 2012.『ことばの意味とはなんだろう―意味論と語用論の役割』. 岩波書店.

研究発表第 3 室［152 教室］

司会①②：山内昇（大同大学）

①13:00～13:35

後日再会した場面での再感謝の機能―談話展開と感謝ストラテジーの日中対照分析から―

市原明日香（お茶の水女子大学）

「後日の再感謝」の言語行動の出現率は日中で異なること明らかになっているが、談話における機能や、中国語母語の日本語学習者が接触場面において、どのようにふるまうのかについては明らかにされていない。そこで、本研究はロールプレイにより収集した談話データから、感謝ストラテジー（Eisenstein & Bodman 1986）と出現ターンの位置を分析し、日中それぞれの母語場面と接触場面における再感謝の特徴と談話展開上の機能をみた。日本語は「会話のオープナー」（Coulmas 1981）の機能であり、「行動を伴わず負担の軽い」類の感謝ストラテジーが使用されていた。一方、中国語では「行動を伴い負担の重い」類の感謝ストラテジーが使用され、実質的な感謝のやりとりとして談話が展開される特徴がみられた。日本語学習者の発話の中には母語の影響の例だけでなく、日本語の語用論的慣習に言語調整する例がみられた。

参考文献：(1) Coulmas, F. 1981. “Poison to your soul: Thanks and Apologies contrastively viewed.” *Conversational Routine*. The Hague: Mouton. (2) Eisenstein, M. and Bodman, J. 1986. “I very appreciate: Expressions of gratitude by native and non-native speakers of American English”. *Applied Linguistics,* 7(2), 167-185.

②13:40～14:15

前方照応における中国語指示詞「这」「那」の使い分けについて―日本語・英語との対照を兼ねて―

孟鷹（名古屋大学）

日本語・英語の指示詞に関する先行研究では，前方照応的な指示詞の選択について，談話参加者の知識管理の観点から説明されるものが成果を上げている（久野 1973，Oshima & McCready 2017 など）．対して，同じ観点から中国語の指示詞について考察する先行研究は管見の限りほとんど見当たらない．本発表では，先行研究を踏まえ，知識管理のアプローチが「这」「那」の用法の説明に適応できるかどうかを検証し，対話における前方照応的な「这」「那」の使い分けを考察したうえで，日本語・英語と比較対照することを目的とする．

参考文献：(1) 久野暲. 1973.『日本文法研究』東京：大修館書店. (2) Oshima, David Y. and McCready, E. 2017. “Anaphoric demonstratives and mutual knowledge: The cases of Japanese and English.” *Natural Language & Linguistic Theory* 35(3), 801-837.

司会③④：大江元貴（金沢大学）

③14:30～15:05

依頼メールにおける外的修正ストラテジーの習得について
　　―JFL 中国人日本語学習者を対象として―

孫雨晴（大阪大学）

本研究は中国人日本語学習者の依頼メールの外的修正ストラテジーの習得と日本語母語話者との比較を行なうため、中国にいる N2・N1 学習者それぞれ 51 名、53 名、日本語母語話者 53 名を対象に、「ゼミの先生に推薦状を書いてもらう」というタスクを設定し依頼メールを書いてもらった。その後、計 157 通のメールを Pan(2012)などに沿って設定された外的修正カテゴリーで分析した。一元配置分散分析と事後検定の結果、N2 学習者は N1 学習者との間に有意差があり、日本語母語話者との間にも差が有意であったが、N1 学習者と日本語母語話者の間に差は有意ではなかった。個別の外的修正ストラテジーの使用から見た結果、それぞれの学習者グループと日本語母語話者との間に差が有意であったが、N1 学習者と N2 学習者の間に差が有意ではない外的修正ストラテジーもあれば、三つのグループ間の使用に有意差がない外的修正ストラテジーも出た。

参考文献：(1) Pan, P. C. 2012. “Interlanguage Requests in Institutional E-Mail Discourse.” In M. Economidou-Kogetsidis & H. Woodfield (Eds), *Interlanguage Request Modification*, 119-161.

④15:10～15:45

日本映画の中国語字幕における異文化要素

張顔顔（東北大学）

本発表では、日本映画の異文化要素が中国語字幕にどのように処理されたかをスコポス理論（Skopos Theory）の観点から考察を行う。中国で公開された二本の日本映画から異文化要素を抽出して分析したところ、ストーリー展開の中心となる要素は、起点文化をできるだけ保持する起点志向のストラテジーが多いが、物語にそれほど重要でなければ、観客の文化に近づけた目標志向の戦略がとられることが分かった。

参考文献：(1)Nord, Christiane. 1997. *Translating as a purposeful activity*. Manchester: St. Jerome.
(2) Pedersen, Jan. 2011. *Subtitling Norms for Television*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

研究発表第 4 室［153 教室］

司会①②：井出里咲子（筑波大学）

①13:00～13:35

Pragmatic Analysis of the Inaugural Speeches of Presidents Obama and Aquino: A Comparative Study

GUERRERO Maria Leonora (Philippine Normal University)

This comparative study aimed at determining the speech acts features of the inaugural speeches of US President Barack Obama and Philippine President Benigno Aquino III by identifying the three types of speech acts: locution, illocution, perlocution. Data analysis was made following the Speech Act Theory of both Austin (1962) and Searle (1969). Findings on the pragmatic moves of President Obama’s speech revealed that majority of his utterances is assertive. As to the perlocutionary effects, President Obama could have impressed on his audience his realizations of what America had been through in the past that may incur empathy. His firmness, confidence and optimism may also be felt in his speech. Conversely, President Aquino’s speech was dominated by utterances which are both assertive and commissive. In terms of the perlocutionary effects to the audience, President Aquino may leave the following emotions on them: optimism, sincerity, responsiveness,

assurance. In conclusion, speech acts in political speeches may shed light on the politicians' intentions through their utterances and the possible effects of these utterances on the listeners.
Key Words: pragmatics, speech acts, inaugural speeches

②13:40～14:15

Pragmatics of the Japanese instructional speech: Grammatical constructions and social meanings of women' s language

HIRAMOTO Mie (National University of Singapore)

By combining politeness and women's language, this research investigates politeness strategies seen in 'instructional speech' data taken from YouTube. I define 'instructional speech' as a speech register used by those giving lectures in a seemingly-formal context such as tutorials for lifestyle improvement skills such as cooking and gardening. In particular, pragmatic functions of the beautification prefix o-, and the serial verb constructions 'verb-te-ageru' will be discussed. After the quantification, Chi-square test was conducted for statistical analysis. The results indicate that female instructors demonstrated a higher degree of the o-beautification prefix usage ($p < 0.05$) compared to male instructors. At the same time, the 'verb-te-ageru' construction did not show statistically significant differences beween female and male instructors. I explain the results by hypothesizing that, the instructional speech first spread among female instructors, then further spread to the male instructors as a domain specific speech register.

司会③④：黒嶋智美（玉川大学）

③14:30～15:05

Using Board Games to Support and Enhance Speaking and Pragmatic Skills in English Language Learners

DUNKLE Shane (University of Chicago)

My research explores the use of a specific genera of board game called "social deduction games" as a better tool for ELLs than traditional role plays to produce utterances that more closely resemble the linguistic forms and pragmatic skills that English dominant speakers produce in specific contexts. I will start off by defining and giving examples of what types of speaking board games are best used in the ESL/EFL classroom context and analyze what features of these games apply to language learning both linguistically and pragmatically. I will then outline the results of a research project where I incorporated these games in my spoken communication classes that resulted in students producing more realistic utterances than in a role play control group. Finally, I will conclude with why board games should be used more in most language learning settings to promote better pragmatic and speaking skills in any language.

References: (1) Ishihara, N. and Cohen, A. 2010 *Teaching and Learning Pragmatics*. Routledge. (2) Ross, S. and Kasper, G. 2013. *Assessing Second Language Pragmatics*. Palgrave MacMillan. (3) Jones, N. and Saville, N. 2016. *Learning Oriented Assessment: A Systematic Approach*. Cambridge University Press.

④15:10～15:45

Monologic Deixis: Two Distinct Conceptions behind Reflexive Speech Event

KOGUMA Takeshi (University of Shiga Prefecture)
IZUTSU Katsunobu (Hokkaido University of Education)
KIM Yong-Taek (Georgia Institute of Technology)

Japanese allows first- but not second-person pronouns to occur in a monologue directed to the speaker him/herself (e.g., watasi [*anata] nani yatten-no?), whereas Korean and English allow both first- and second-person pronouns. Furthermore, Japanese does not allow a self-reference by the speaker's own name in such a monologue (e.g., (*Kenzi) nani yatte-nda) but Korean and English do. We argue that these differences in monologic self-reference are linguistic manifestations of the distinctive conceptions of reflexive speech event employed by each language. Japanese presupposes a reflexive speech-event conception wherein Speaker speaks to one's own self, invisible except some body parts like legs, hands, etc. à la Mach's (1914: 19) self-portrait; hence bona fide reflexive speech where Speaker and Addressee merge together. Conversely, Korean and English presuppose an event conception with Speaker sitting face-to-face with Addressee, where Speaker identifies Addressee as if this latter were a reflection of oneself in the mirror.

References: Mach, E. 1914. *Analysis of sensations and the relation of the physical to the psychical*. Chicago. London: Open Court Publishing Company.

語用論茶寮（サロン） / Pragmatics Salon （13:00～15:45）

[147 教室]

前回大会で好評だった「語用論茶寮〔サロン〕」を今大会も開きます。語用論研究にまつわる話をしに、どうぞお気軽にお越しください。大会発表や S/P への論文投稿に関する相談でも、はたまた「あの先生と話してみたい！」という動機でも、もちろんかまいません。今回は下記の「話し相手」と日時で行います。スロットは口頭発表と並行していますので、発表と合わせてご計画ください。（24 日もあります）
（予約可でそれ以外は枠内での先着順、と考えていますが、詳細については後日また会員メーリングリストでご案内します。）

①13:00-13:35　滝浦真人（放送大学、S/P 編集委員長）鍋島弘治朗（関西大学、PSJ 副会長）
②13:40-14:15　滝浦真人（放送大学、S/P 編集委員長）堀江薫（名古屋大学）
③14:30-15:05　小野寺典子（青山学院大学）　加藤重広（北海道大学、PSJ 会長）
④15:10-15:45　尾谷昌則（法政大学）小野寺典子（青山学院大学）首藤佐智子（早稲田大学）堀江薫（名古屋大学）（各時間帯、五十音順）

会員総会 / General Meeting（16:00～16:20）

大教室［141］

会員の方はご参加ください。
議題：本大会のテーマについて・大会発表賞の発表表彰・会長等役員の改選についてなど

招待講演 / Plenary Lecture (16:20～17:50)

大教室［141］

司会：田中廣明（京都工芸繊維大学）

"English as a Lingua Franca: The Pragmatic Perspective"

Prof. Istvan KECSKES (The State University of New York)

Abstract: English as a Lingua Franca (ELF) is a term used to describe the use of English as a common language for communication between speakers whose first language is not English. Providing a unique and original perspective on this subject, this talk explains the language behavior of ELF speakers, through the lens of Gricean pragmatics. It brings together the main viewpoints of the Gricean paradigm into ELF research, to discuss and better understand the nature of ELF interactions, as well as explaining how Gricean pragmatics can benefit from investigating and analyzing ELF. It presents intriguing ideas that put existing knowledge into a new perspective, such as interactional competence, intention, implicatures, the semantics-pragmatics interface, and modality. New terms and viewpoints such as language use mode, deliberate creativity, temporary extension of the system, emergent common ground and modality continuum are introduced into the ELF debate.

In sum, this talk (1) changes and enhances the way we think about ELF and linguistic creativity; (2) explores what ELF can add to our existing knowledge about pragmatics; and (3) examines the semantics-pragmatics interface from a new perspective to clarify the relationship of linguistic sign and context in processing meaning.

講師紹介：

イシュトヴァーン・ケチュケーシュ先生（ニューヨーク州立大学名誉教授）

Dr. Istvan Kecskes (University of New York, Albany)

ニューヨーク州立大学のイシュトヴァーン・ケチュケーシュ先生をお迎えして招待講演を行います。アメリカ語用論学会会長であり、Chinese as a Second Language Research 編集長でもあるケチュケーシュ先生は、第二言語習得、バイリンガリズム、社会認知的な語用論などについて幅広く研究をされています。今回は近刊の *English as a Lingua Franca: The Pragmatic Perspective* (Cambridge University Press、2019 年 12 月出版)より、リンガフランカとしての英語を題材に、グローバル化が語用論理論に与える影響について、社会認知学のアプローチからお話しいただきます。ケチュケーシュ先生にはほかにも"From Pragmatics to Dialogue"（共編著、Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 2018）、"Current Issues in Intercultural Pragmatics"（共編著、Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 2017）、"Intercultural Pragmatics"（著書、Oxford University Press、2013）など数多くのご著書があります。ケチュケーシュ先生のご研究の詳細については以下のリンクをご参照ください。

https://www.albany.edu/faculty/ikecskes/

https://www.albany.edu/communication/i_kecskes.php

Dr. ISTVAN KECSKES is Distinguished Professor of the State University of New York, USA. He teaches graduate courses in pragmatics, second language acquisition and bilingualism at SUNY, Albany. Professor Kecskes is the President of the American Pragmatics Association (AMPRA) and the CASLAR (Chinese as a Second Language Research) Association. He is the founder and co-director of the Barcelona Summer School on Bi- and Multilingualism, and the founder and co-director of Sorbonne, Paris – SUNY, Albany Graduate Student Symposium. His book "Foreign Language and Mother Tongue" co-authored by Tunde Papp and published by Erlbaum in 2000 was the first book that described the effect of the second language on the first language based on a longitudinal research. Dr. Kecskes' book "Intercultural Pragmatics" published by Oxford University Press in 2014 is considered a groundbreaking monograph that shapes research in the field. His latest books are "Current Issues in Intercultural Pragmatics" published by Benjamins in 2017, "Explorations in Chinese as a Second Language" published by Springer in 2017 and "Key Issues in Chinese as a Second Language" published by Routledge in 2017. He just completed a new book titled "English as a Lingua Franca: The Pragmatic Perspective" to be published by Cambridge University Press in 2019.

懇親会 / Conference Banquet （18:00～20:00）

4 号館 6 階学生食堂

会費：一般 5,000 円、学生 4,000 円
（交流と議論の場です。お一人でもご遠慮なくお越しください）

１１月２４日（日曜日）

受付開始 / Registration（8:30～）

研究発表⑤～⑨ / Oral Presentations（9:00～12:30）

研究発表第 1 室［142 教室］

司会⑤⑥：小松原哲太（立命館大学）

⑤9:00～9:35
譲歩からの意味変化 -韓国語の連結語尾 -(u)ntul を中心に

YU Jooyoung（九州大学）

本研究は、韓国語の譲歩表現-(u)ntul の意味変化を考察する。-(u)ntul は動詞や形容詞の後に付いて文と文を繋ぐ連結語尾である。従属節の動作や状態を仮定し、主節には従属節から期待されることに反する内容が来る。しかし、-(u)ntul が文末語尾のように単独で使われる最近の用法では、主節の内容が慣習的に肯定的な意味で解釈される。その動機付けとして本研究で得られた結論は次のとおりである。言語使用において-(u)ntul の「期待否定」の意味が主節に否定表示が来ることを促し、-(u)ntul 譲歩文の主節には否定文が来る比率が高くなった。このような文脈が繰り返されることによって、-(u)ntul＋否定文という構文変化が起こる。-(u)ntul は従属節に反する内容を強調するため、主節に修辞疑問文を伴うことが多い。否定表示が修辞疑問文に現れる時、否定の反対の意味に解釈されるため「肯定的評価」という新しい意味が生まれる。

参考文献：Traugott, Elizabeth Closs & Graeme Trousdale. 2013. C*onstructional changes and constructionalization*. Oxford: Oxford University Press.

⑥9:40～10:15

日本語における副詞節の後置

海寳康臣（九州歯科大学）

本発表では、無標の語順をとる「頭痛がひどかったので、昨日は一日家で寝ていました。」という文の副詞節を文末に移動したような形式の「昨日は一日家で寝ていました、頭痛がひどかったので。」のような文について、Zipf (1949)の最小労力の原則と Levinson (2000)が提唱する M 推意 (M-implicature)の観点から考察し、次の２つの見解の妥当性を示す。（Ⅰ）副詞節が後置されている文の主節および後置節は、原則として、聞き手にとって経済的でなければならない。（Ⅱ）副詞節が後置されている文は、主節および副詞節が聞き手にとって経済的でない場合でも、M 推意が引き出される場合、許容される。

参考文献：(1) Levinson, S. C. 2000. *Presumptive Meanings*. Cambridge MA: MIT Press. (2) Zipf, G. K. 1949. *Human Behavior and the Principle of Least Effort*. Cambridge MA: Addison-Wesley Press. [Reprinted by Martino Publishing, Mansfield Centre, CT, 2012.] (3) 冨樫純一. 1998.「従属節の後置」.『筑波日本語研究』3. 18-32.

司会⑦：鍋島弘治朗（関西大学）

⑦10:20～10:55 [Invited presentation]

Ei as Topic Transition Signal in Mandarin Conversation

Prof. YU Guodong (Shanxi University)

Abstract: The topic of a conversation is the subject or theme of the conversation, and topic transition is a collaboratively constructed social and interactional achievement. In this study, topic transition is an umbrella term which covers both a shift in topic (topic shift) and a change in topic (topic change), in accordance with the relationship that exists between the new and previous topics. Furthermore, by considering the sequential position at which topic transition occurs, this phenomenon can be classified as either non-disruptive or disruptive transition. Topic transition in the two-party Mandarin conversations which were collated for this study is self-attentive in nature. To compensate for the suddenness of a transition, the person implementing the transition uses the free-standing interjection *ei* as a signal to indicate that an upcoming transition is about to take place, thereby downgrading the suddenness of a topic transition in Mandarin conversations.

Keywords: topic shift; topic change; topic transition; *ei*; transition signal; Mandarin

司会⑧⑨：金丸敏幸（京都大学）

⑧11:15～11:50

「今日紹介する商品はこちら。最新薄型テレビ！」：主題の導入を演出する定型表現

大江元貴（金沢大学）

本発表は，商品や人物などの紹介場面に観察される「～コ系指示詞（だ)。名詞（だ)。」(例：私が今回発表する本はこちら。ドリアン助川さんの『あん』という本です。）という文連続を定型表現と位置づけ，その語用論的機能（意味）と定型性（形式）について考察する。まず，この定型表現が談話の主題を演出的に導入して聞き手の注目を集めるという語用論的機能を持つこと，構文的には指示詞を述語とする名詞文と主述構造を持たない名詞文の二文から成り，第一文と第二文のいずれかが体言止めになっているという定型性が抽出できることを指摘する。その上で，この定型表現が，指示詞と「指し言語」的な名詞文によって立て続けに同じ対象に聞き手の注意を誘導する念入りな共同注意確立行動として実現していることを確認し，このようなコミュニケーション行動上の特徴が当該定型表現の語用論的機能を動機づけているという分析を示す。

参考文献：(1) 平田未季. 2016.「共同注意確立過程における話し手による指示詞の質的素性の選択」『語用論研究』18. 28–47. (2) 本多啓. 2005.『アフォーダンスの認知意味論』東京：東京大学出版社. (3) Wray, Alison. 2002. *Formulaic language and Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.

⑨11:55～12:30

絵文字を用いた隠語の生成過程と変換プロセス ―Twitter「情報垢」の投稿を例に

西村綾夏（京都大学）

本研究では Twitter 上の隠語を対象とし、絵文字を使った隠語の生成過程と絵文字への変換過程を記述・分類する。具体的には、Twitter 上で芸能人の個人情報などを秘密裏に共有する「情報垢（情報共有アカウント）」の投稿を収集し、投稿中に用いられた絵文字のふるまいを石原（2018）の基準に従って分類した。

その結果、絵文字を使った隠語は石原（2018）の示した方法を踏襲する形で生成されており、目的とする集団からは容易に理解できるよう配慮されていること、一方で検索されやすさは下がっており、目的外の集団や検索機能から発見されにくくする意図があることが示唆された。

絵文字への変換過程では、対象となる概念からの絵文字化と音韻をもとにした絵文字化の二つの類型が確認された。音韻をもとにした絵文字化が多いのは、絵文字では抽象的な事物を指し示しづらいためと考えられ、この難点を補う新たな用法の発生も確認できた。

参考文献: (1) 安彦智史・長谷川大・プタシンスキミハウ・中村健二・佐久田博司. 2018. 「ID 交換掲示板における書きこみの隠語表記揺れを考慮した有害性評価」『情報システム学会誌』 13 (2): 41–58. (2) 石原若奈. 2018. 「2 ちゃんねる『同人板』の『伏字』：計量分析から見る変形の特徴」『現代日本語研究』 10 (3): 35–52.

研究発表第 2 室［143 教室］

司会⑤～⑦：中井延美（明海大学）

⑤9:00～9:35

慣習的表現の非慣習的読みに関する考察 ―「文字通りの NP」を例に―

近 大志（京都大学大学院）

慣習表現(熟語、慣用句)は文脈によって非慣習的解釈を受ける場合がある(e.g. 爆弾に関する発言という意味で「爆弾発言」、トラの赤ちゃんという意味で「虎の子」)。

本発表は、非慣習的解釈が出現しやすい「文字通りの NP」に焦点を当て、その解釈プロセスの説明を試みる。

実例は主に新聞のデータベース(聞蔵 II)や SNS から採取し、説明には関連性理論で表意形成プロセスの一環として仮定されているアドホック概念形成(cf. Carston 2002)を用いた。　そして、考察では次の 3 点を主張する。

①「文字通りの」は後続する NP の構成要素の符号化された意味にアクセスさせる機能を持つこと

②非慣習的解釈は語彙的収縮と語彙的拡大が同時に適用されることで導出されること

③慣習表現の非慣習的な使用は聞き手にダブルミーニングの把握をもたらす場合があり、その際、②の方略が関与すること

参考文献:

(1) Carston, R. 2002. *Thought and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication.*

(2) Moreno, Rosa E. Vega. 2007. *Creativity and convention: The pragmatics of everyday figurative speech.*

⑥9:40～10:15

of+抽象名詞の形式と機能の関係

藤原崇（摂南大学）中村文紀（北里大学）鈴木大介（摂南大学）

本研究では、「of+抽象名詞」の形式と機能の関係について、対応する形容詞と比較を行いながら、その特性を明らかにする。具体的には、of interest を扱い、その類義表現である interesting と比較することで、生起環境（文脈）に関する特徴を引き出す。数ある要因の中から最も両者の使用に影響を及ぼす二要因に限定し、その要因の大きさおよび交互作用を具体的に示す。その際、コーパスからの用例を利用した質問紙による調査を実施し、英語母語話者から得られたデータに基づいて議論を進める。結果として、(i)主語の種類と(ii)モダリティという各要因の影響とそれらの交互作用

を確認できた。得られた結果から、形式と意味の関係について類像性の観点から説明が可能であることを主張すると同時に、実験的手法の利点も併せて示唆する予定である。

参考文献: (1) Quirk, R. (1968) "Co-existing negative preterite forms of dare." In Quirk, R. *Essays on the English Language: Medieval ad Modern.* London: Longman, 114-19. (2) Haiman, J. (1980) "The iconicity of grammar: Isomorphism and motivation." *Language* 56, 515-40.

⑦10:20～10:55

事態の直前を表す「V ところ」について

染谷聡（東京福祉大学）

この発表では、事態の直前を表す「V ところ」について考察する。第一に、事態の直前を表す「V ところ」「V ところだった」が表す意味は、少なくとも 3 つに区別できることを示す。①その後の継続的な展開を伴う事態の直前（準開始）、②その後の継続的な展開を伴わない事態の直前、③結末に向かう過程が途中で絶たれた間一髪の事態。第二に、事態の直前を表す「V ところ」に接続する動詞の種類と意味の分類を、工藤（1995）の動詞分類を用いて詳細に分析する。第三に、間一髪の事態を表す「V ところだった」とフランス語の間一髪の半過去を対照し、言語類型論的な観点から分析する。

参照文献
工藤真由美. 1995.『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現』ひつじ書房.
寺村秀夫. 1978「『ところ』の意味と機能」『寺村秀夫論文集 I 』くろしお出版　321-336.
渡邊 淳也. 2007.「間一髪の半過去をめぐって」『文藝言語研究・言語篇』52（筑波大学） 151-175.

司会⑧⑨：堀江薫（名古屋大学）

⑧11:15～11:50

複合動詞「X＋散らかす」の新規的用法―人はなぜキレ散らかすのか？―

松浦光（横浜国立大学）菊地礼（中央大学）貝森有祐（東京大学）

従来、複合動詞「X＋散らかす」（e.g.「食い散らかす」）は、使役変化タイプの中でも周辺的なものであり、V2 に意図性がなく V2 を V1 の目的だと解釈しづらいことから、「原因―結果型」に分類されてきた。（野田 2011; 陳・松本 2018）しかし、インターネット上には「社長にキレ散らかす」のように「使役変化」や「原因―結果」として見なすことが難しい用例も数多く見られる。これは「キレた結果としてモノが散らかる」という意味ではない。このような用例は既存のコーパスにはほとんど見られない。

本発表では複合動詞「X＋散らかす」について Twitter を中心に調査し、先行研究の記述だけでは捉えられない新規的用法が多数観察されることを見る。さらに、「X＋散らかす」を統語的・意味的特徴に基づいて分類し 4 つのタイプを認めることで、新規的用法についても適切に記述できることを論じる。

参考文献: (1) 陳奕廷・松本曜. 2018.『日本語語彙的複合動詞の意味と体系：コンストラクション形態論とフレーム意味論』.東京. (2) 野田大志. 2011.「現代日本語における複合語の意味形成―構文理論によるアプローチ―」名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文.

⑨11:55～12:30

insubordination と慣習性：感情表出機能を持つ that 節の場合

平尾恵美（奈良女子大学）

"That you should say such a thing!" という発話は話し手の感情を表出し、「君がそんなことを言うなんて！」などと訳出される。このタイプの表現は insubordination（従属節の主節化）の一例と考えられるが、十分な研究はなされていない。Evans (2007)は、insubordination を定義するとともに、当該言語現象の形成には、省略と慣習化の関わる 4 つの段階が存在することを主張している。本発表は、この主張を踏まえ、上掲の例のような感情表出機能を持つ単独用法の that 節が、Evans の 4 段階の中で 3 番目の段階に位置する insubordination であることを明らかにすることを目的とする。具体的には、①当該用法の語用論的機能（感情表出機能）は慣習的なもので取り消せないこと②

当該用法に解釈上の主節を回復させることが可能であること③「解釈上の主節を回復させた後の文」と「元の単独用法の that 節」との間には大きな乖離がないことの 3 点を中心に議論する。

参考文献：(1) Evans, N. 2007. “Insubordination and Its Uses.” In I. Nikolaeva (ed.) *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations,* 366-431. Oxford: Oxford University Press. (2) Sansiñena, M. S., H. De Smet, and B. Cornillie. 2015. “Between Subordinate and Insubordinate. Paths Toward Complementizer-Initial Main Clauses.” *Journal of Pragmatics* 77, 3-19.

研究発表第 3 室［152 教室］

司会⑤～⑦：笹本涼子（ダブリンシティ大学）

⑤9:00～9:35

英・仏・西語談話標識 well, bon, bueno に共通する対人的調整機能

高村遼（青山学院大学）

本発表では、英・仏・西語の談話標識（discourse markers）である well, bon, bueno に共通して見られる対人的調整機能について報告する。これら 3 つの語彙項目は、副詞あるいは形容詞として「良い」という意味論的意味を有している。しかしながら、談話標識として用いられる場合には、「良い」という意味は漂白し、例えば、well は、話し手の意見に対する「相違」や「好まれない応答」に先導する。この時、もともと「良い」という意味を示す well を先に利己的利用することで、相手の面子を脅かさないようにする対人的調整機能を果たしている。このような現象は、英語談話標識 well にとどまらず、仏語及び西語でも報告されていることから、人は他人に対して良くありたいという願望が基盤にあると考えられる。本発表では、英語を中心として、仏語、西語を通言語的に観察し、自然発話のデータを分析することにより、相互行為の対人的調整の普遍性について検討したい。

参考文献：(1) Brémond, C. 2004. “La petite marque bon, l’indice d’un accord 23nc ours de négociation.” *Travaux de Linguistique* 48 ： 7-19. (2) Brown, P. and. Levinson S.C. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (3) Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press. (4) Travis, C. E. 2005. *Discourse Markers in Colombian Spanish: A study in Polysemy*. Berlin：Mouton de Gruyter.

⑥9:40～10:15

話題転換マーカーに関する日英対照研究: speaking of which と「そういえば」の対応関係を例に

山内昇（大同大学）新實葉子（大同大学）

英語の speaking of which と日本語の「そういえば」は，どちらも発話動詞と前方指示的な語句（which・そう）を伴い，話題の転換場面に使用されるなど，両表現には意味・機能上の類似性が認められる。実際に一部の辞書では，speaking of which の訳語として「そういえば」が記載されており，「そういえば」の訳語としても speaking of which が記載されている（英辞郎［第十版］参照）。しかし，本研究の調査で収集したデータを観察すると，「そういえば」として訳せない speaking of which の事例や speaking of which として訳せない「そういえば」の事例が存在することが分かる。両表現の用法に関しては，一部の研究において記述が進められているが，両表現の対応関係に関しては論じられていない。そこで本研究では，両表現の対訳上の対応関係を整理し，その関係に不一致が生じる理由を機能的観点から考察する。

参考文献：(1) 早瀬尚子. 2014.「Speaking of which：懸垂分詞構文由来の談話標識化について」『大阪大学英米研究』38, 59-69. (2) 山内昇. 2015.「Speaking of の使用条件に関する記述的考察」『英語語法文法研究』22, 183-199. (3) 杉本和之. 1996.「「そういえば」の意味と機能」『愛媛国文と教育』29, 1-10.

⑦10:20～10:55

談話標識「トイウカ」の手続き的意味―文法化の視点から―

川北麻由（東京大学）

本発表では、談話標識「トイウカ」の手続き的意味について、談話分析の視点から考察し、その手続き的意味が表出する背景を文法化という観点から考察する。先行研究では、吉澤(2003)をはじめとして、談話標識「トイウカ」をコミュニケーション上の問題を緩衝するものとして扱う場合が多かった。しかし、マグロイン花岡(2007)で指摘されているように、「トイウカ」で反対意見を示す場合も見られる。そこで本研究では、談話における「トイウカ」の手続き的意味が、コミュニケーション上どのように作用するか明らかにしたうえで、文法化に伴う主観的態度の表出という視点から、その手続き的意味と文法化との関係について考察する。

参考文献：(1)マグロイン花岡直美. 2007.「文頭の「ていうか」とメタ言語否定」、 久野 暲・牧野成一・スーザン・G・ストラウス(編)『言語学の諸相―赤塚紀子教授記念論文集』、 155-176.東京:くろしお出版.(2)Traugott, E. C. 1995. "Subjectification in grammaticalization.". *Subjectivity and subjectivisation*, Cambridge: Cambridge University Press, 31-54.

司会⑧⑨：増田将伸（京都産業大学）

⑧11:15～11:50

ママ友グループ間会話におけるイン／ポライトネス分析 ―子どもの扱いに注目して―

大塚生子（大阪工業大学）

本研究は，ママ友らのコミュニケーションにおいて，子どもがどのように取り扱われているかに注目し，そこでのフェイスワークを考察することを通し，彼女らがいかにママ友関係を継続・維持しているかをイン／ポライトネスの観点から明らかにすることを目的とする。

４人のママ友らによる実際のグループ間会話の談話分析を通し，１．月齢の低い子どもへの言及や直接的な語り掛けが多く見られること ２．より年齢・月齢の高い子どもを持つ母親が自分の子どもを引き合いに出して過去の経験を語ったり，アドバイスを行う場面がみられることが明らかになった。しかしいずれの場合も自分の子どもにばかり話題が集中したり，経験語りが長引いた場合には自分や自分の子どもに対する否定的発言を行ったり，他参加者へと話題を転換するなど，自己と他者のフェイスが同等に保たれるようなストラテジーを用いて配慮を示していることが観察された。

参考文献：Goffman, E. 1967. *Interaction Ritual: Essays on Face Behavior*. New York: Pantheon Books.／大塚生子・柳田亮吾（2017）「ポライトネスと利害・関心：社会関係資本としてのママ友に注目して」第 20 回日本語用論学会研究発表大会.

⑨11:55～12:30

相互行為における引用標識「って」：連鎖とターンデザインに基づく検討

臼田泰如（国立国語研究所）

本研究では，他者の発話を引用する場合などに用いられることのある日本語の副助詞「って」が会話においてどのように用いられ，それによって参与者たちはどのような行為を達成しているのか，を明らかにする．『日本語日常会話コーパス』から収集した会話事例をデータとして扱い，会話分析の手法で分析を行う．分析により，特に過去の出来事などを時系列的に語る「物語」を行っている場面において興味深い事例が見出された．物語において「って」がターンの末尾において生じるとき，その物語はまだ終結せず，語られるべき続きがあることが多い．したがって物語において，つまり語り手が語り終えるまでターンを保持する状況において，まだターン交代が適切でないことを示す．「って」は会話においてはターン末尾に生じうるが，統語的には文が完結していない形式である．そのため，統語的な後続要素が生じない場合でも，「まだ続きがある」ことを理解可能にする資源になっていると考えられる．

参考文献

加藤陽子. 2010. 『話し言葉における引用表現：引用標識に注目して』日本語研究叢書 25 東京：くろしお出版.

Jefferson, G. 1978. *Sequential Aspects of Story Telling in Conversation*. In J. Schenkein (Ed.) *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. New York: Academic Press. 213-248.

研究発表第 4 室［153 教室］

司会⑤～⑦：北野浩章（愛知教育大学）

⑤9:00～9:35

A Conversation Analytic Study of Doing Challenging in English:
Focusing on Appendor Wh-Questions

JONES Sally (Nagoya University)

This paper will examine how the appendor wh-question – a linguistic format consisting of a preposition plus a wh-word question (e.g., for what) – is used to do challenging in English conversation. Previous research has examined the appendor wh-question to a degree (cf., Egbert, Golato, & Robinson, 2009), but it is of yet to be studied in terms of doing challenging. The data in this study comes from 135 hours of naturally-occurring interaction in English. Employing the methodology of Conversation Analysis, approximately 80 instances of appendor wh-questions were analyzed. The analysis revealed that appendor wh-questions are used to challenge the grounds on which the prior speaker is claiming something. In response, these prior speakers give an account, resist giving an account or back down from their assertions, which shows their orientation towards the appendor-wh-question speaker as communicating a challenging stance.

Reference

Egbert, Maria, Golato, Andrea, & Robinson, Jeffrey D. (2009). Repairing Reference. In J. Sidnell (Ed.), *Conversation Analysis: Comparative Perspectives* (pp. 104-132). Cambridge: Cambridge University Press.

⑥9:40～10:15

The pragmatics of three Chinese reformulation markers:
'Zhe Me Shuo Ba', 'Ye Ke Yi Shuo', and 'Ye Jiu Shi Shuo'

PANG Longjie (Nagoya University)

Utterances introduced by reformulation markers seem to achieve their relevance in the same way, but the pragmatics of reformulations differ greatly from each other due to the use of distinct markers (Blakemore 2007). In Chinese, Zhe Me Shuo Ba (ZMSB), Ye Ke Yi Shuo (YKYS) and Ye Jiu Shi Shuo (YJSS), as reformulation markers, are interchangeable in some cases, but the pragmatics of these reformulation markers are relatively idiosyncratic. In this study, I aim to compare the pragmatics triggered by these markers and to clarify how they affect utterances they introduce to achieve relevance with the notion of 'interpretive resemblance' (Sperber & Wilson 1995).

Reference:

(1) Blakemore, Diane. 2007. "'Or'-parentheticals, 'that is'-parentheticals and the pragmatics of reformulation." *Journal of linguistics* 43-2, 311-339. (2) Sperber, Dan & Deirdre Wilson. 1995. *Relevance: Communication and cognition*. Oxford: Blackwell.

⑦10:20～10:55

A Study of the Speech Event of 'Offering' in English from the Viewpoint of Politeness

SUZUKI Toshihiko (Waseda University)
SATO Ami (Nagoya University of Commerce and Business)

This study aims to examine the speech event of 'offering' drawing on Leech's (2014) model of politeness and Spencer-Oatey's (2008) framework of rapport management, based upon the results of analysis of offer-response dialogues in English. 'Offering' is classified as a commissive type of speech act (Searle, 1969), whereas it is observed as both commissive and directive types in actual interactions (e.g., Leech, 2014). In relation to its fuzziness, offering is considered to be governed by two different maxims in Leech's (2014) politeness model, Generosity and Tact. We have found in our data that offering is mainly performed in accordance with the Tact Maxim. The reason for this can be explained by the notion of 'sociality rights and obligations' (Spencer-Oatey, 2008). In response to offers observing the Tact Maxim, the participants largely chose to

hold rapport maintenance orientations. Additionally, we found rapport neglect/challenge orientations in a considerable number of refusing replies.

References: (1) Leech, G.N. 2014. *The pragmatics of politeness*. Oxford: Oxford University Press. (2) Spencer-Oatey, H. 2008. Face, (Im)politeness and Rapport. In H. Spencer-Oatey (Ed.), *Culturally speaking: Culture, communication and politeness theory.* (pp.11-47). London/New York: Continuum.

司会⑧⑨：山口征孝（神戸市外国語大学）

⑧11:15～11:50

Onomatopoeia, Translation and Relevance: A Corpus Pragmatics Approach

SASAMOTO Ryoko (Dublin City University)

This study aims to challenge the widely held assumption that onomatopoeia poses a challenge for translators and hence is often omitted from the target text. It is often argued that translators face particular challenges when it comes to onomatopoeia. However, most studies are descriptive and lack empirical support or theoretical underpinning. Against this backdrop, this study takes the Relevance-Theoretic approach (Sperber and Wilson 1986/1995) and explains how and why onomatopoeia is, or is not, translated. Parallel corpus was built with user-generated data from the popular Japanese cooking website Cookpad, along with their English translations. Instances of onomatopoeia uses were analysed in terms of target text expressions, causes for omissions, and the text categories. This study shows that the decision to omit onomatopoeia seems to be motivated by the careful consideration for not imposing unnecessary processing effort for the reader, not due to difficulties in translation as previously considered.

References

Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition.* Oxford: Blackwell.

⑨11:55～12:30

Pragmatic functions of gestures in L1 and L2 interaction

IKE Saya (Sugiyama Jogakuen University)

From a World Englishes perspective, this study investigates the pragmatic use of gestures in interaction, focusing on frequency and functional meaning of gestures in Australian English (AusE) and Japanese English (JE). Language competency plays a role in determining the degree of reliance on non-verbal elements in interaction, and competent L2 (JE) speakers show increasing similarity to L1 speakers in the use of gestures. However, studies also suggest that gestural behaviours are culturally diverse, and thus the use of certain gestures in JE may be influenced by their L1, Japanese. Using the gesture categorisation (McNeill, 1996) and the analytical framework by Kendon (2004), this study first compares JE dyads and AusE dyads, and identifies distinctive use of gestures in JE. It then analyses cultural/linguistic influences on gestures in JE by comparing gestural behaviours in JE and Japanese dyads. This study contributes to better describing Japanese English as a variety of English.

語用論茶寮（サロン） / Pragmatics Salon （9:40～12:30）

[147 教室]

前回大会で好評だった「語用論茶寮〔サロン〕」を今大会も開きます。語用論研究にまつわる話をしに、どうぞお気軽にお越しください。大会発表や S/P への論文投稿に関する相談でも、はたまた「あの先生と話してみたい！」という動機でも、もちろんかまいません。今回は下記の「話し相手」と日時で行います。スロットは口頭発表と並行していますので、発表と合わせてご計画ください。（23 日もあります）

（予約可でそれ以外は枠内での先着順、と考えていますが、詳細については後日また会員メーリングリストでご案内します。）

⑤の時間帯は行いません。
⑥ 9:40-10:15　井出里咲子（筑波大学）尾谷昌則（法政大学）名嶋義直（琉球大学）
⑦10:20-10:55　加藤重広（北海道大学、PSJ 会長）松井智子（東京学芸大学）森雄一（成蹊大学）横森大輔（九州大学）
⑧11:15-11:50　澤田淳（青山学院大学）名嶋義直（琉球大学）横森大輔（九州大学）
⑨11:55-12:30　尾谷昌則（法政大学）澤田淳（青山学院大学）鍋島弘治朗（関西大学、PSJ 副会長）森雄一（成蹊大学）（各時間帯、五十音順）

昼食休憩 / Lunch　（12:30～13:30）

シンポジウム / Symposium　（13:30～16:00）

大教室［141 教室］

テーマ『音声・言語・こころ：ヒトのコミュニケーションの進化的起源をいかに捉えるか』

司会：松井智子（東京学芸大学）
登壇者：岡ノ谷一夫（東京大学）香田啓貴（京都大学）橋彌和秀（九州大学）

シンポジウム主旨

言語・コミュニケーションとそれらを可能にするヒトのこころの進化的起源についての研究動向を俯瞰し議論します。講師・司会として、文部科学省新学術領域「共創的コミュニケーションのための言語進化学」メンバーが登壇します。本領域は「階層性」と「意図共有」を２つの柱として、これらの融合としての言語進化（共創言語進化）のメカニズムを解明し、コミュニケーションの未来と人類の存続のあり方を提言することを目指すものです。http://evolinguistics.net/

シンポジウムでは近年の言語進化研究の全貌をご紹介いただくとともに、語用論とも関わりの深い、音声および意図共有の果たす役割に着目して議論いただきます。言語の起源を進化生物学的な視点から論じ、コミュニケーションにおける語用論的側面の意味を新たな視点から見直す貴重な機会です。ぜひお誘い合わせてご参加ください。

講師紹介

岡ノ谷一夫（東京大学）：小鳥の歌の進化と機構から、人間言語の起源についてのヒントを得る研究で知られている。また、近年では動物とヒトの比較研究から、言語と感情の起源を探っている。
香田啓貴（京都大学）：言語の起源やその進化史について、動物との比較を通じて研究を行っている。そのうえで、ヒトをふくむ霊長類のコミュニケーションがどのように進化してきたのかを研究している。
橋彌和秀（九州大学）：コミュニケーションの発達とその進化を研究している。また並行して成人の「非言語」的なコミュニケーション行動の実験的分析、チンパンジーなどヒト以外の霊長類を対象とした実験研究もおこなっている。

コミュニケーション信号の多様性とその進化要因

岡ノ谷一夫（東京大学）

人間言語の特徴として、音節の多様性と組み合わせの多様性がある。全く同じことがある種の鳥の求愛の歌にも見られる。ジュウシマツのオスがうたう歌には多様な要素があり、それらが多様な組み合わせを持って歌われる。ジュウシマツの祖先であるコシジロキンパラの歌には、このような多様性は多くない。鳥類の歌の多様性の進化要因として、メスによる多様性への好みと、家禽化による多様性のコスト低減とが考えられる。同様な過程が、ヒト言語の成立にも寄与しているかも知れない。（本研究は、新学術共創言語進化による支援を受けた。）

サルの発声からヒトの発声に至る道筋

香田啓貴（京都大学）

霊長類の生物学としての研究の特色は，ヒトのさまざまな行動について進化的な考察と視点を与える可能性なのかもしれない。なぜならば，行動が発現するに至る認知過程やその神経基盤，身体設計など，生物学的要素に高い相同性が存在するという前提にたてるためである。化石には残らない言語をはじめとするヒトに固有とされる行動の進化の過程を紐解く可能性が，種間比較という手段には存在する。しかし，種間比較を通じた言語進化の考察にあたっては，さまざまな相違点に直面する。その代表は，言語創発を支える下位機能としての発話能力の問題であろう。とりわけ，発声運動操作に関与する神経基盤および音韻産出を支える形態基盤の双方において系統発生と個体発生の観点でサルとヒトで決定的な乖離が観察されてきた。それでは，ヒトの系統で突如として発話が出現したと考えてよいのだろうか？発声能力自体をさらなる下位機能の統合の結果生じた運動能力であるという仮説を仮定したうえで，霊長類進化のいかなる過程で能力統合が生じ発声能力獲得へ至ったのかについての見解や最新の話題提供をしたい。

「こころの階層性」は誰にとって必要なのか

橋彌和秀（九州大学）

1970 年代以降の自然科学の進展は「こころ」やコミュニケーションというそれまでは漠然としていた概念さえも検証可能なかたちで取り扱うことを可能にした。外部情報を整合的に処理する内的なメカニズムとしてのこころは、ヒトだけに備わるものではないが、現代の知見と方法論は「ヒト的なこころとはどのようなものか」という根源的な問いを明示化し挑むことが可能な地点に達している。本発表では、”Theory of Mind”概念を手掛かり としつつ、他者の知識・注意状態の「理解」を反映した教示・関心行動の初期発達や、重層化された他者理解の基盤となる比較的「ゆるやかな」発達についての我々自身の研究を ご紹介したい。

閉会のあいさつ　Concluding remarks　（16:00～16:15）

大教室［141 教室］

１１月２５日（月曜日）

ポストカンファレンス　Post Conference

[京都外国語大学 R941（9 号館・国際交流会館 4 階会議室）]

（※キャンパスプラザ京都から変更になりました）

受付開始(Reception)14:30～

特別講演（Special Lecture）（15:00～16:30）

″The socio-cognitive approach to pragmatics″

イシュトヴァーン・ケチュケーシュ先生（ニューヨーク州立大学名誉教授）
Dr. Istvan Kecskes (Distinguished Professor of the State University of New York, Albany)

趣旨：ケチュケーシュ先生には、学会での講演と違って、小規模な会場でカジュアルなレクチャーをお願いしています。タイトルにある「社会・認知的な語用論へのアプローチ」(the socio-cognitive approach to pragmatics）とは、語用論的な意味での協調性（cooperation）と、認知的な意味での「自己中心性」（egocentrism）が、コミュニケーションの諸局面で相互に作用しながら現れるとするものです。社会的な存在である個人が、自身の知識や経験を基にコミュニケーションに参加し、試行錯誤や誤解などのマイナス要素も想定したアプローチで、哲学の伝統にある従来の語用論よりもダイナミックな理論が提案されています。会話分析、用法基盤モデル、コーパス研究など、現実の言語使用を基にコミュニケーションにアプローチしようとする語用論研究者にとって、必ずや得るところ大です。平日の開催となりますが、ぜひ万障繰り合わせてお越しください。

なお、『語用論研究』19 号（2017）に、田中廣明氏による「Istvan Kecskes の社会認知的アプローチ（Socio-cognitive Approach to Pragmatics）について」がありますので、ぜひお読みください。

Abstract: The socio-cognitive approach (SCA) to pragmatics initiated by Kecskes (2010, 2014) integrates the pragmatic view of cooperation and the cognitive view of egocentrism and emphasizes that both cooperation and egocentrism are manifested in all phases of communication, albeit to varying extents. While cooperation is an intention-directed practice that is governed by relevance, egocentrism is an attention-oriented trait dominated by salience which is a semiotic notion that refers to the relative importance or prominence of signs. One of the main differences between current pragmatic theories and SCA is that there is no "impoverished" speaker meaning in SCA. The speaker utterance is a full proposition with pragmatic features reflecting the speaker's intention and preferences and expressing the speaker's commitment and egocentrism (in the cognitive sense). The proposition expressed is "underspecified" only from the hearer's perspective but not from the speaker's perspective. Second, communication is a dynamic process, in which individuals are not only constrained by societal conditions but they also shape them at the same time. As a consequence, communication is characterized by the interplay of two sets of traits that are inseparable, mutually supportive, and interactive:

Individual traits:	Social traits:
prior experience	actual situational experience
salience	relevance
egocentrism	cooperation
attention	intention

In SCA interlocutors are considered as social beings searching for meaning with individual minds embedded in a socio-cultural collectivity. Individual traits (prior experience à salience àegocentrism à attention) interact with societal traits (actual situational experience à relevance àcooperation à intention). Each trait is the consequence of the other. Prior experience results in salience which leads to egocentrism that drives attention. Intention is a cooperation-directed practice that is governed by relevance which (partly) depends on actual situational experience.

★　大会の注意点　★

◆プログラム・要旨集の紙媒体廃止について
　前回大会より、プログラム・要旨集の紙媒体での配布を廃止しております。代わって学会公式ホームページ上に電子媒体（PDF）にて本プログラム・要旨集を公開しました。大会にご参加の皆様はノート PC にダウンロードしてご持参になるか、予め紙に印字してご持参いただくか、いずれかの方法にてご利用ください。

◆研究発表用資料について
　第 22 回大会では、研究発表（口頭発表）の発表資料を事前に学会公式サイトからダウンロードできるよう準備を進めております。詳しくは事前の会員メーリングリスト等でアナウンスいたしますので、ご確認ください。
　なお、当日の印刷資料も各発表者が用意することになっていますが、発表に参加しない方が印刷資料だけをお持ちになることはお控えくださいますよう、お願いいたします。

◆大会会場でのインターネット接続について
　会場の 1 号館の中での Wi-Fi サービスは、国際学術無線 LAN ローミング基盤「eduroam」と、公衆無線 LAN スポット「KYOTO Wi-Fi」がご利用頂けます。
　- eduroam 参加機関に所属しておられる方は、ご自身の所属機関が発行しているアカウントをご確認下さい。
https://www.kufs.ac.jp/news/detail.html?id=N1hUP6eM　(eduroam 接続方法)
　- KYOTO Wi-Fi はどなたでもご利用頂ける無料の Wi-Fi サービスです。
http://www.kufs.ac.jp/cms_image/file/file_1490943095.pdf　(KYOTO Wi-Fi 接続方法)

　ただし、当日は Wi-Fi が混雑する恐れもありますので、本プログラム・要旨集、ならびに当日発表資料につきましては、なるべく事前にダウンロードしておかれることをお奨めいたします。

PSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJ

大会開催委員（開催校）：
　　野澤　元（京都外国語大学）

大会運営部・運営委員（50 音順）：

有光 奈美（東洋大学）	井出 里咲子（筑波大学）
井上 逸兵（慶應義塾大学）	岡本 雅史（立命館大学）
金丸 敏幸（京都大学）	北野 浩章（愛知教育大学）
鈴木 光代（東京女子医科大学）	高木 佐知子（大阪府立大学）
鍋島 弘治朗（関西大学）	西田 光一（山口県立大学）
野澤 元（京都外国語大学）	山岡 政紀（創価大学）

大会運営部・部員（50 音順）：

小松原 哲太（立命館大学）	杉本 巧（広島国際大学）
竹田 らら（東京電機大学）	八木橋 宏勇（杏林大学）
山泉 実（大阪大学）	横森 大輔（九州大学）

日本語用論学会会長：　加藤 重広（北海道大学）
日本語用論学会事務局長：　小山 哲春（京都ノートルダム女子大学）
日本語用論学会事務局：　〒606-0847 京都府京都市左京区下鴨南野々神町 1
京都ノートルダム女子大学 人間文化学部 小山哲春 研究室内
E-mail：secretary@pragmatics.gr.jp

PSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJPSJ